② 座談会 地域の芸術文化

市民活動と行政・地域とのかかわり

■西田由紀子・市来利之・金森秀利・岡本紀子・長谷川直・竹森正樹

1―芸術文化活動と地域との関係
2―行政と市民・企業の関係
3―活動の継続性
4―行政に望むこと
5―参加をすすめるには

1―芸術文化活動と地域との関係

竹森　きょうは、青葉、都筑両区の新区誕生イベントにかかわった方にご出席いただき、それぞれの活動の経験を通して、広く地域の芸術文化について考えてみたいと思います。

僕は育ちも今までの活動の中心も、中区や南区あたりでしたので、都筑区や青葉区というと、中区などとの地域像の違いを強く感じます。

そこで、地域像とか、地域の歴史といったことから話を始めたいと思います。

僕などは活動する場合、その地域をつくってきた歴史というものを非常に意識しますが、皆さんの事業ではどうだったのか。地域の歴史を強く意識して、作品のテーマに取り入れるとかしたのか、しなかったのか、それはなぜかをお伺いしたい。

岡本　いろいろな人が参加し、お互いを知り合うのが大事だという気持ちがあったので、出演者は区全体に公募するなど、古くから住んでいる人たちとの交流もこころがけました。

ただ、歴史をうたおうとか、作品に入れようとかは全く考えなかったです。

西田　私たちの場合は、ドラマづくりの発端が「住んでいる街、地域を実感したい」ということでした。青葉区は広い街ですし、古い伝統もあり、新しく開発された街もあり、いろいろな顔を持っている。テーマを一つに絞れない、いろいろな要素を入れたいということで、四本のドラマをオムニバスでとなりました。

結果として、第一話は歴史のからんだストーリーになりましたが、他の三つは違います。最初から歴史を盛り込もうとしてつくるのとは違うように思います。

竹森　日常をとらえたら、たまたま歴史に裏づけられた場面もあったということですね。

西田　そして逆に、これからどういうふうに街をつくっていこうかと、みんなで考え、話し合ったから、歴史も現実も未来も込められた。

地域を実感する

竹森　西田さんの話で、これはと思ったのは「地域を実感」という言葉です。僕の場合、四代もいるから逆にあらためて「地域を実感する」という感覚はないですからね。

西田　青葉区には、昔から代々住んでいる人がいる一方で、開発後に新たに住むようになった人もかなり多い。学生やサラリーマンは昼間、東京や横浜の都心方面に出ていき、地域にはいません。その間、地域に残っている人は、また別の忙しい日常を送っています。改めて立ちどまったときに「地域を実感する」という言葉が出てきたのはそんな事情からかと思います。

岡本　私たちも全く同じです。こういうことをやる前は「横浜都民」とよくいわれるように、地に足がついていない、間借りしているような感じで、暮らしている実感がない。都筑区の住民だという意識が希薄でした。それが、ミュージカルづくりに参加することで、ここに住んでいるんだ、生きているんだと実感できるようになりました。

西田　ある方が言っていましたが、何年も住んでいるけれど、区内でも自分の家のまわりぐらいしか見えない。それがドラマづくりに参加してロケに出かけたり、いろいろな場所で打ち合わせしたりして初めて、街の素顔が見えたと言うんです。

竹森　確かに僕らも知っているようで知らないのが地域ですね。

地震があったというので、最近みんなで防災地図をつくりました。中区には井戸が八十以上もあって、湧水と指定を受けているのも四つあったんです。そういうのを知って、だんだん興味がわいてくるのは文化事業のおか

＜座談会＞
開催日　平成七年九月十二日
出席者
西田由紀子　青葉物語ドラマ委員会委員長
市来　利之　東急ケーブルテレビジョン放送部編成課長
金森　秀利　青葉区地域振興課生涯学習支援係長
岡本　紀子　ミュージカル制作・上演委員会委員長
長谷川　直　都筑区地域振興課生涯学習支援係長
コーディネーター
竹森　正樹　㈲マサキオフィス代表

げで、文化は街に関心をもつのに格好なきっかけになります。

そういう意味で、区民の文化活動とまちづくりとは密接な関係にあると思いますが、行政の方いかがですか。

長谷川　「北極星を探して」は、確かに都筑の歴史を紹介するという意味での歴史性はないですが、ここを自分たちの新しいふるさとにしていくんだという意気込みが歌詞の中にある。コミュニティづくりは、今や行政にとっての大命題ですから、そんなにはっきりメッセージのような形で言ってもらっていいのかなと思うぐらいです。これから自分たちのふるさとを、歴史をつくっていくんだという意味での歴史意識は、活動の中に十分含まれていたと思います。

金森　「青葉物語」では身近な問題をとらえていった結果、非常に多くの区民がかかわりました。非常に多いというのは、スタッフやキャストの人数だけでなく、例えば、ちょっと事務所の電話番をしたとか、ロケ地として庭先を貸してくれたというふうな形でかかわった人を数えると、何倍にもふくれあがるんです。こうした多くの区民のかかわりが大事ではないかと思います。

区民がいろいろな形で交流して―交流というと穏やかですが、ときにはぶつかり合いもあり、一つのものができあがる。それが積み重なっていって、その地域、青葉区なら青葉区の文化や地域性が出てくるのだと思います。

行政としては、区民が交流できる場をいろいろな形で提供することが必要なことだと考えています。

作品の成功の原因

竹森　広く参加してもらうきっかけづくりとしての意義ですね。だから、地域の事業はできあがった作品だけで評価すべきではないのでしょう。とはいっても、作品としてもすごいですが。演技もさることながら、シナリオの運びとかとても好きでした。

金森　ドラマの質についていえば、区民がコンセプトを考え、技術的な指導も含めてのイニシアチブはケーブルテレビがとり、行政は場づくりをしたという、三者の関係がうまく機能したせいではないかと思います。

竹森　作品の評価についてもう少し言うと、例えば、大阪の芸人さんが来て横浜市民の役をやっても、それは「演じる」ことになるわけです。その点「北極星を探して」もそうですが、皆さんの場合リアルなんです。シチュエーションのリアルさと、演技の説得力です。ビデオというフィルターを通してでもよくわかります。作品といっても作りものでない部分があるからかもしれません。作品性に走らず「この街で」という点に最初から最後までこだわったのが、逆に結果として成功したのだと思います。

2―行政と市民・企業の関係

成功のパターン

竹森　成功と言えば、成功している事業のときに、行政の方が決まって言う言葉は「僕は何にもしてないよ」です。本当に何もしていないかと冷静に見てみると、まさしく縁の下の力持ちなんです。

例えば、イベントが終わり汗だくで帰ってくると、区役所の地下の風呂に入れてくれる。担当の人が、僕らの知らない間に守衛さんに話をつけるとか、いろいろとお膳立てをしておいてくれたんです。

西田　土・日も一緒に作業していると、いつの間にか、役所の人とかケーブルテレビの人というのを忘れるほど一体感がありました。ケーブルテレビさんはプロだから自分でやった方が早いんですが、市民のサポート役に徹してくださって、随分はがゆいところがあったと思います。そういう意味では、役所もケーブルテレビさんも、市民の活動を大切にしてくれました。本当はもっと手も口も出したかったと思うけれども、素人がゼロからやるところを見ていてくれた。

竹森　それが成功している区役所のパターンですね。

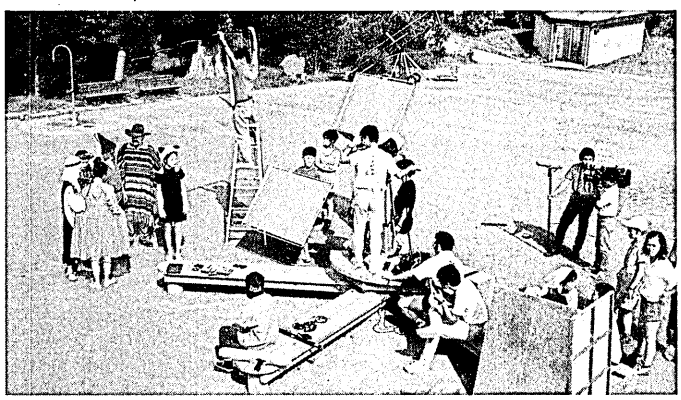
なぜ企業が参加したか

竹森　ところで、ケーブルテレビさんはなぜ参加されたのですか。変な言い方で恐縮ですが、企業が相当な出費をはらみつつ、なぜ参加したのか。フィランソロピーだ、メセナだといっても厳しい経済情勢にあって、企業が取り組むには強い動機づけが必要だと思いますが。

市来　確かに企業としては相当赤字になり、かなりつらい。西田さんが言われたように、僕らがポンとつくるのとは想像がつかないほどの手間もかかる。

最終的には、西田さんをはじめみんなの熱

「公園の多い街」撮影シーン



意と、竹森さんが言われた成功する区役所のパターン―「おれは何もしてないよ」と言いつつも、いつもそばにいてくれる―青葉区役所がそうしてくれるなと思ったんですよ。ならば、僕らが「やる」と言えば動くのに、ここで「やらない」と言えるわけがないだろうという気持ちが非常に強かった。

実際、区役所はよくやってくれました。みんな勝手なことをいいまくっている状態に、黙ってそばで見守っていてくれて、しかも冷めているのでなく、仕事の範囲をはるかに超えたのめり込み方をしていました。土曜日の深夜一時、二時までTシャツを着て、一緒に荷物を運んでドロドロになってやっているわけですから。

おっしゃるとおり、うちにしてもメセナどころではない。あえていうなら、イメージアップ―長い目で見てケーブルテレビが受け入れられて加入者が増え、会社の発展につながるだろうという考え方ですね。ただし、厳密に数字でいくらと表せない。そういう意味では厳しかったけれども、役所とのつながりもあるし、区民の方の気持ちにこたえなきゃというのもあり、何とかやりました。

西田　以前、郷土史番組をやはり市民とケーブルテレビと区役所の三者で組んで制作した。そのときから信頼関係ができていたのであって、いきなりゼロからのスタートではなかったと思います。

竹森　これも成功例でよくあることですが、最後は個人の熱意であると。組織や機構の中での役職がどうだったからというのではないですね。担当している人の熱意がどうだったかで完全に決まってしまう。いや、おれは何にもしてないよ、というかもしれないけれども、その人がかなり頑張っていたりとか。

見切り発車の決断

竹森　岡本さんの方は、企業の参加を考えられましたか。

岡本　考えてはいました。私たちは初め、九百万というとんでもない予算―でも、それぐらいはかかるんですが―の企画書をポンと出しちゃったんです。新庁舎ができるんだ、では私たちに落成記念のミュージカルをやらせてよ、という感じで出してあっさりとけられてしまった。熱意と自信はあっても、行政との間の信頼関係が全然なかった。

「北極星を探して」レッスン風景

手直しして再度出しましたが、一度不採用になった企画を通すのは大変らしく、区役所から補助金がもらえるかどうかはっきりしない状態が長く続きました。でも、補助が決まってから始めたのでは稽古が間に合わないので、見切り発車しました。

事業の規模からして入場料収入だけではまかなえず、区役所の補助がなければ企業協賛でと考えていましたが、幸い、長谷川係長をはじめ皆さんのお陰でまとまった補助金をいただけるようになり、企業協賛なしで済みました。

ただ、地元のいろいろな方からは、お金以外の形での協力をいただきました。事務所として、不動産会社の一室を無料でお貸しいただき、いまだにそのままです。ほかにも、衣装の提供やら何やら細かいことをいろいろやっていただいています。

有料化と舞台の質

長谷川　強いていえば、入場料を取るようにしたのが協賛に当たる部分かもしれません。企業からはお金はいただかなかったけれど、見ていただく市民の方にちょっと負担してもらった。

ただ、有料にしたのは必ずしも予算的な理由だけではありません。お金を払ってでも見てもらえる責任を持った作品をつくるという意味合いもあってのことで、予算が足りないから入場料を取っちゃえというのとは違います。

岡本　見る側の見方も違ってくると思います。千円でも出していれば真剣に見てくれます。

長谷川　真剣さでいうと、先ほどに舞台の出来栄えがよかったとお褒めいただきましたが、見る人はお金を払って見に来ていて、演じる方も素人だけれど、舞台の場合は一回しか演ずるチャンスがない。それで、相当のテンションの高まりがあって、見る方も真剣に見たし、やる方も真剣にやり、かなりの出来栄えになったのでしょう。

岡本　特に舞台は、見る人も実際そこに行って演じる人と空間を共有するわけです。相乗効果があるし、お客様がとても温かく、舞台の人たちも一生懸命という、一つの空気ができ上がって、それが舞台の出来栄えにつながったんだと思います。

長谷川　こちらに引きつけて言わせていただくと、そういう濃密な瞬間を地域の中で持てるということは、一種のコミュニティづくりにも密接な関係があるし、地域の文化水準が高いか低いかということとも関係してくると思います。

3 活動の継続性

活動のゆくえ―二つのタイプ

竹森　これからの活動について伺いたいと思います。

岡本　「北極星…」をやった人たちが中心になって、ＹＴＭＰＰＣ（横浜都筑ミュージカル制作上演委員会）というのを立ちあげました。オリジナルにこだわり、二年に一作ぐらい新作をつくって上演できたらというのを目標にしました。第一回公演として「北極星…」の再演を十二月の二十三、二十四日に、委員会主催でやります。それに向かって、今、準備を進めているところです。

竹森　継続には何が大事ですか。

岡本　今のところ、この間の興奮がまだ残っていますので、これからだとは思います。

竹森　三年目…、次は五、六年目が危ないですよ。（笑）

岡本　団塊の世代が中心なので、強いて挙げれば年齢で、そのうちくたびれてしまわないか、いつまで続くかという心配はあります。

竹森　年齢というより、活動を始めたころは平社員だったのが役職について忙しくなったり、育児に手のかかる時期は活動に出られなくなったりと、ある世代がごそっと抜けるということがありますね。

西田　「青葉物語」では、参加した人たちがまたドラマをつくるという動きはないですが、そこで出会った人たちがバンドをつくったり、身近でいい映画を上映する会ということでシネクラブをつくったり、というふうに活動が広がっています。若い方ですと、これがきっかけでディレクターの道に行きたいとか、就職をそちらの道に求めた人もいます。

竹森　そのパターンと、岡本さんたちのように一つのミュージカルでずうっと行くというのと両方のタイプともあり得ますね。

一つになれない理由

市来　「青葉物語」の今後ということですが、せっかくここまでやったんだから、その先は何かないのかという話は随分あるんです。バンドを組んだり、映画を見る会をつくったり、制作の方に走ったり、あとは演劇の団体をつくらないかとか。いろいろあるんですが、みんなで一つのことをやろうという動きにはなれないんですね。

なぜかというと、例えばロックをやるのなら、集まるのは割と若い人に限定されます。趣味で集まるのなら、メンバーが限定できてまとまるんですが、「青葉物語」の場合は趣味とか嗜好でなく、何かやりたいというところから始まっている。ドラマを成功させようというところだけで、みんな一致していたんだけど、実は主義主張や趣味はばらばらです。次に全く同じことをやるならともかく、そうでないと考えていることは全然別だから、また一つに集まろうといっても無理なんです。

竹森　難しいのは趣味の問題です。例えば、シュールレアリスムが好きという人もいれば、いや、ドラマは大衆に受けなきゃいかんという人もいるわけで、これだけはまとめることができないんですね。

西田　ただ、ドラマが完成した後に、もう一度「青葉物語」のグループが立ち上がるのではなく、それが一つの火種になり個々に様々な展開をしていく―どう発展していくかなという楽しみがあります。

4 行政に望むこと

竹森　行政に対する何か注文はありますか。

西田　注文というより、パートナーシップの関係ができつつあると思うので、これからも大事にしていけたらなと強く感じています。

岡本　私もいい関係を続けてほしいなと思っています。続けて活動していきたいので。

「北極星を探して」制作経過

平成五年
- 六月・オリジナルミュージカル上演準備会発足
- 九月・原作完成
- 十一月・脚本、作曲完成
- ・オーディション

平成六年
- 一月・出演者、スタッフ顔合わせ
- 二月・発声・ダンス、演技の基礎レッスン開始
- 五月・配役決定
- 六月・稽古開始
- 七月・都筑区総合庁舎落成記念ミュージカル制作・上演委員会設立
- 九月・記者発表
- 十月・大道具、小道具製作開始
- ・相鉄ジョイナスでＰＲイベント
- 十一月・上演日決定
- ・「ハートフルフェアイン都筑」にＰＲ出店

平成七年
- 二月・ポスター、ちらし、チケット完成
- 三月・チケット販売開始
- 四月・大道具、小道具、衣装完成
- ・プログラム完成
- ・上演

竹森　課題は、現在の関係が続くかということなんでしょうか。

異動の弊害と対策

西田　もう一つあります。今回、ドラマづくりの途中で担当の係の方々の異動がありました。組織には異動がつきものでしょうが、一つのイベントをやっている途中だと行政側も区民側も大変です。地域の文化を育てていくためには、もっと長期的に考えていただけたらと思います。

市来　丸二年にわたるまさに正念場の、さあこれからというときに、主要なメンバーが変わってしまった。委員会でいえば、委員長と副委員長が明日からいなくなって、全然知らない人が一人来るというのに近い状況です。これはちょっといくら何でもと。だから、後任の金森さんの苦労は我々以上だったでしょう。

西田　聞くところによると、青葉区に限らず、また地域文化振興だけでなく、行政のいろいろなところで担当者の異動によって事業の引き継ぎが滑らかに行かないということを聞きます。

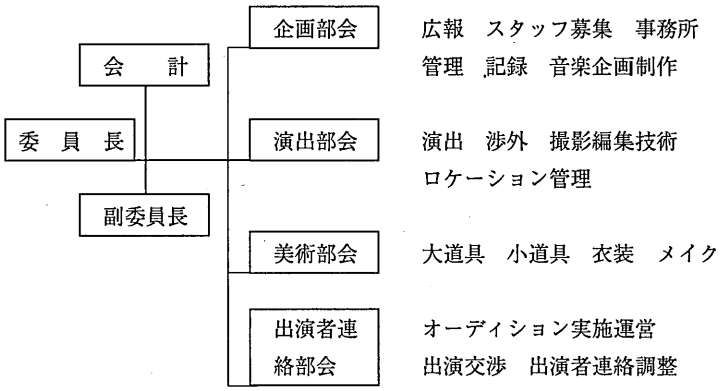
　ずうっと異動がないというのは組織では難しいと思いますが、例えば、美術館の学芸員のように、企画とか全体の流れをつかんでいる人が役所とか公会堂にもいるといいなと思います。

金森　「青葉物語」では、区役所にもその担当の職員はいましたが、予算も含めて事務局は街の人たち、実行委員でやっていただきました。ほかのいろいろなイベントの実行委員会では、区が事務局になってお金の出し入れも含めて事務的なことを行っています。そういう意味で「青葉物語」の実行委員会は自立性が高かった。

　これからは企画するだけでなく、予算の管理から、こまごました事務、例えば通知の発送など、事務局機能を実行委員会の中に培っていき、事業を文字どおり区民主体で行うことができればと考えております。

竹森　行政にずうっと頼っていると、区民の側も発展がない。市民が自立して事務局から何から機能をもっていれば、異動はこわくないといえるかもしれない。

青葉区物語ドラマ委員会組織図



5　参加をすすめるには

竹森　皆さんにもう一つだけお伺いします。皆さんは活動に参加して、行政との信頼関係をつくられた。一方で、全く参加してない人の方が多いわけですが、今後、地域の中でそういう人の参加を活発にしていくにはどうしたらいいんでしょう。

人の発掘が大切

長谷川　幸い都筑区には、自分たちで何か活動していこうという人が、たくさんいるような気がします。そういう人たちからいろいろな要望があったときに、うまく事業という形にしていければ、いろいろな活動ができるのではないかというのが一つです。

　そうはいっても、きっかけがないとなかなか始められないですから、お祭りのときとか機会をとらえて人を発掘していく。さらに、公募して一定の要件を備えた文化活動には補助するというような制度を考えたらよいのではないか。

　ただ、「北極星…」のように多額の予算を必要とするものは、公募がなじむかどうかわからない。比較的小口の事業はそういう制度で発掘していったらよいのではと考えています。

　発掘と言えば、やる気のある職員が一生懸命いろいろな事業を通して地道に情報を集めていると、そういう日常の活動の積み上げの中から、質のよい情報が集まってくる。現場の強みというか、そんな所に区役所の仕事の楽しさもあるという気がします。

「青葉物語」完成までの足跡

平成四年
　秋　・新区誕生記念ドラマの話がもちあがる

平成五年
　五月・新区誕生記念番組制作実行委員会立ち上げ。（十二日）
　九月・実行委員からディレクターを選出（二日）
　十月・ドラマ四話のタイトルを決定（二十一日）
　十一月・統一タイトルを「青葉物語」と決定し、実行委員会を「青葉物語ドラマ委員会」と改称（四日）
　・「青葉物語」制作記者発表（二十四日）

平成六年
　一月・全五回のドラマセミナーを開催
　～二月　延べ三百九十名参加
　三月・第一回出演者オーディション（六日）
　・ドラマ委員会事務所開き（十日）
　・出演者オーディション二次審査（十三日）
　四月・撮影開始の記者発表・記者会見（二十二日）
　・第一話クランクイン（二十三日）
　六月・第二話クランクイン（四日）
　・第二回出演者オーディション（十九日）
　七月・第三話クランクイン（十六日）
　八月・こどもの国でポスター撮影（二十日）
　・第四話クランクイン（二十七日）
　九月・テーマソング完成（十五日）
　十月・完成記者発表・記者会見（六日）
　・東急ＣＡＴＶで放映開始（一話ずつ四週にわたり）（九月）
　十一月・青葉区誕生。ビデオ・記念誌の貸出開始（六日）
　・完成記念打ち上げパーティー（二十日）

岡本　異質な人が交流するという点では、大きなイベントの意義は大きいと思います。特定の仲間だけで、自分たちのテリトリーの中だけでやっているのでは、地域の活動としての意味が弱い。

人の発掘という意味で、行政にはいろいろな人がかかわっていける大きなイベントをどんどん仕掛けていってほしいと思います。

ミュージカル出演者たち～レッスン会場から

見るだけでも参加

西田　「青葉物語」の参加でおもしろい試みだったなと思うのは、青葉区の二十五万区民全部を巻き込みたいと考えたところです。そのために、あなたは出る人ですか、見る人ですか、つくる人ですかと。見る人でもいいんですよ。ケーブルテレビの放送やビデオを見て、ああ、どうだこうだと思ったり、関心を持つだけでも参加したことになるんだということで、みんなで張り切りました。見たことによって参加感を持った人もいるんです。もう一つそこから踏み出せば、本当の参加になるんですから。

街の仕掛け人がもっとたくさん育って来たらいいですね。音楽でも芝居でもお能でも何でもいいんですが、仕掛け人がもっと成熟してたくさん育ってきて、いろいろな分野に出てくることによって、巻き込める市民の方たち、間口が広がるのではないか。身近なところでポンポン火をつけていく人がもっといっぱいいたらいいなというふうに感じます。

一極集中か、総花か

金森　多くの区民にどうアピールするかは非常に難しい。文化は一極集中でいいのか、総花でなければいけないのか。

今の予算規模からすると、一つに予算を集中させないと大きい事業は難しいし、いろいろな区民のニーズにこたえるには総花にならざるを得ない。その選択をどうしたらいいのか模索しているところです。

長谷川　事業については、いろいろな種類のものを詰め込んだ幕の内弁当方式はよくない、ねらいがはっきりした事業がいいと一般に言われています。しかし実際の場面では、特定のグループだけに補助すると、公正さを欠くというような議論が必ず出て来ます。それは議論してもしようがない。

「青葉物語」や「北極星を探して」のような実績を積み重ねていけば、だんだんそういう文化事業に対する支援が奇異に感じられなくなり、一般化してくる。いい事例を積み重ねていくしか処方せんはないのではないかと思います。

竹森　文化の活性化策について話すとき、必ず、今の長谷川さんと逆を言う人が多いんです。リーダーたちがネットワークをつくり、そのネットワークの組織さえできれば、もっと事業は活性化するという。そんなことは絶対ないんです。表面に見えないだけですでにネットワークできていて、ちゃんと助け合っています。むしろ、とにかくリーダーをポンポンつくっていくことが一番大切だと思います。多分、新しいリーダーが何十人も出てきたら随分変わります。

西田　こういうふうに一緒にものをつくっていくと、参加した人たちとか、題名を知っているだけの人でも、行政を身近に感じるようになり、街の中でいろいろな芸術を育てていくことに違和感がなくなると思います。長谷川さんが言われるとおりで、実績の積み重ねが大切と思います。

人々は地域を見ない

市来　ケーブルテレビで、地域情報や生活情報を番組として八年間やってきての実感は、極端にいうと、ほとんどの人が地域なんか見ちゃいない、地域文化を語る以前の問題ということです。例えば、何か問題があったとき、特集を組み、街頭インタビューをする。しかし、何かあったことすら知らない。編集するのが大変です。百人に聞いてちゃんと答えられるのは五人ぐらいなんですから。

地域にこんなに頑張っている人がいるとか、

こんないいことがあるとか、そういうことをとにかくみんなに少しでも見てもらおうと思って番組づくりをしています。

そういう感覚で見ると、岡本さんとか西田さんのような方たちが頑張ってやっていても、大半の人はそういうことを知らないし、知ろうとしない。「あれは好きな人が勝手にやっているんだろう」という言い方しかしない。「青葉物語」をやっていたときも、そういう言われ方をする場面が実際にありました。それが非常に残念です。その垣根を取り除くのが長期的に見て大事なことだと思います。西田さんが言った「二十五万人を巻き込みたい」というのは、そういう気持ちもあったのだろうと思います。

温かい目で見られる下地づくり

竹森　南区の大岡川沿いに柵があるんですが、そこに子供たちの絵を展示するリバーサイドギャラリーというイベントをやったことがあります。クリスマスの頃で、その見張り番をやるのがとても寒い。すると、知らないおばさんがポットにコーヒーを持ってきて、飲めと言うんです。最初、その人も実行委員なのかなと思っていたんですが、器を返そうと思ったら全然関係のないおばさんなんです。どこの人だかわからないといったら、またそれが、南区のすごいところで、どこの誰だかちゃんとわかっちゃう。

市来　先ほど長谷川さんが言われた、幕の内弁当じゃない形で何かやろうとすると、「こんなもの」というふうにすぐ言われちゃう。けれど、もっとみんなが理解を示していければ、竹森さんのいうネットワークのように、それぞれ趣味が違い、違うことをやっていてもつながっていける。そうなってくるのが理想の姿だと思います。頑張ってやっているのを温かい目で見られる下地づくりが必要な気がします。

行政の頑張りをアピール

市来　こういうつながりができる前は、役所は税金を取るだけで、五時過ぎたらみんなさっさと帰っているんじゃないかという意識が心の隅にあった。実際かかわってみると、皆さん一生懸命考え、働いています。それは痛感します。さっき地域にみんなの目が向いてないと言いましたが、役所に対しても同じで、役所の人がそれだけ一生懸命やっているのを知っている人は百人に一人かなという気がします。だから、僕もメディアとして、地域情報というところで、そこら辺をもう少し手伝うというとおこがましいですが、何か力を出していければいいと思います。

逆に役所への要望としては、せっかくそこまでやっているんだから、もっとわかってもらう努力をしたらいいんじゃないかと思います。

竹森　嵐が来て「何号配備」というのになると、皆さんが防災服を着て……役所の職員は、自分ちよりも先に役所に行かなければいけないんですね。大変だなと思います。でも、行政が市民に、おれたちはこんなに頑張っているんだとは言えないだろうから、僕らが見てきたことを語っていくことじゃないですか。

そういうことも含めて、僕らというか、岡本さんや西田さん、市来さんのような地域に目を向け活動している人たちが、次に何をやるか、何をやり続けていくかーそれが地域の芸術文化にとって重要な鍵になっていくと思います。

きょうは、どうもありがとうございました。